

## 今日の箇所は、創世記2章9節

**【新改訳2017】 創世記2章9節**  
神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

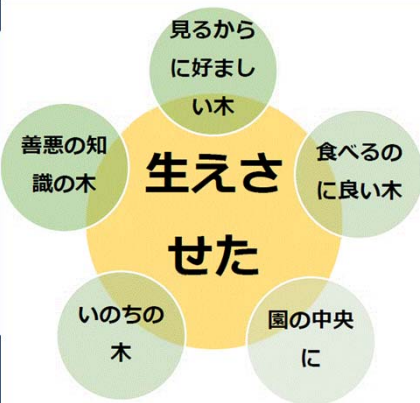
## 今日の箇所は、創世記2章9節

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。  
(創世記2:9)

● 「**生えさせた**」(冒頭にあることばで、今回は二度目)は、9節の中心となる語彙です。そして、その語彙のまわりには「木」についての語彙が初めて登場しています。

- ① 「見るからに好ましい木」
- ② 「食べるのに良い木」
- ③ 「園の中央に」
- ④ 「いのちの木」
- ⑤ 「善悪の知識の木」

これらの語彙をひとつひとつ取り上げます。



## 「生えさせた」(「ツァーマハ」 $\text{נִמְצָא}$ )

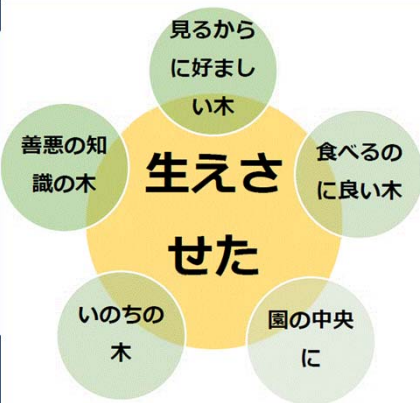
「**生えさせた**」(「ツァーマハ」 $\text{נִמְצָא}$ )は9節が初出ではなく、すでに2章5節に「まだ生えていなかった」とあります。しかし、9節ではエデンの園の地に初めて「生えさせた」ものがあるのです。それは「見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木」です。それは人が「食べる」に良い

「**木**」(「エーツ」 $\text{עֵץ}$ )なのです。神と人が住むエデンの園において、「木」は「神のことば」を象徴しています(単数)。つまり、人は神のことばによって生きるものとされたことが分かるのです。

👉 申命記8章3節、マタイ4章4節参照。

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

(創世記2:9)

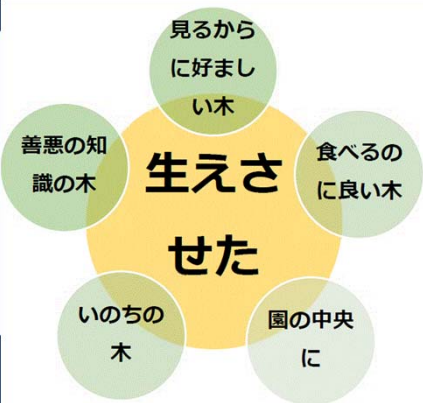


# (1) 「見るからに好ましい木」 (「ニフマード レマルエ」 נִחְמַד לְמַרְאֵה)

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。  
(創世記2:9)

「生える」の「ツァーマハ」(חַמַּץ)が名詞で使われると「**若枝**」(「ツエマハ」 חַמַּץ)となり、それはメシアを表わす比喻となります。

エデンの園に生えたすべての木が「見るからに好ましい」とは、「いかにもおいしそう」という意味で「ハーマド」(חַמָּד)の分詞形「ネフマード」(נִחְמַד)が使われています(創世記3章6節にも)。動詞の「ハーマド」(חַמָּד)には「欲しがる、望む、慕う、喜ぶ」を意味し、名詞の「ヘメッド」(חֶמֶד)は「優美」を意味します。しかしそれは表面的な意味です。「見るからに」の「見る」は「幻」を意味するのです。



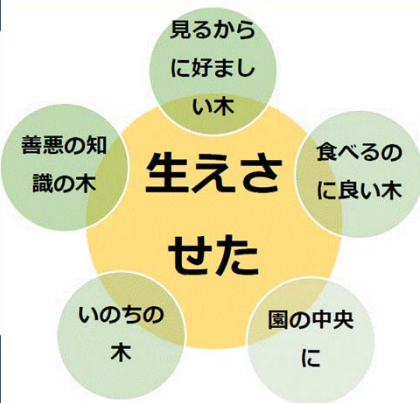
# (1) 「見るからに好ましい木」 (「ニフマード レマルエ」 נִחְמַד לְמַרְאֵה )

【新改訳2017】箴言 29章18節

幻(וִּזְיוֹן)がなければ、民は好き勝手にふるまう。  
しかし、みおしえ(הַתּוֹרָה)を守る者は幸いである。

「幻」は「ハーゾーン」(וִּזְיוֹן)で、「見る」を意味する動詞「ラーアー」(הָאָרָא)と「ハーザー」(הִזָּהַר)は同義です。つまり「幻」とは、神のご計画の完成を見ることを意味します。それが見えなければ、民は好き勝手にふるまうのです。「幻」は神のみおしえ(「トーラー」הַתּוֹרָה)の中に啓示されています。これが「見るからに好ましい木」の真意だと考えられます。

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。  
(創世記2:9)



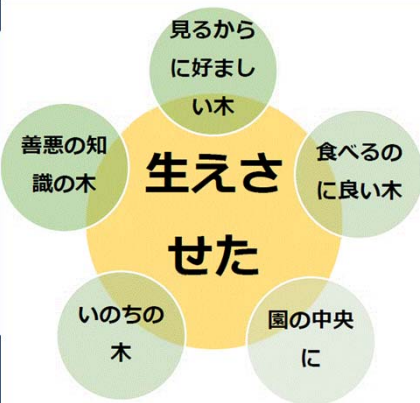
## (2) 「食べるのに良い木」 (「トーヴ レマアハール」 לֵבְנֵי טוֹב )

この表現も、「神のことば」とも言えます。人は「食べる」ことで、その食べ物と一体となるのです。食べることによって、神のことばが人の内に「とどまる」ことで、生きることを意味します。

「良い木」の「良い」(「トーヴ」טוֹב)は神の特愛用語です(創世記 1:4, 10, 12, 18, 31)。神は良い方であり、良いものしか与えることのできない方です。エデンの園の中で、人は「いのちの息」を吹きかけられただけでなく、食べるにふさわしい「すべての良い木」に象徴される「神のみことば」によって生きるものとされました。神のご計画の究極の目的は、人が「神のことば」(黙示録19:9)となって、神と一つになることなのです。

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

(創世記2:9)



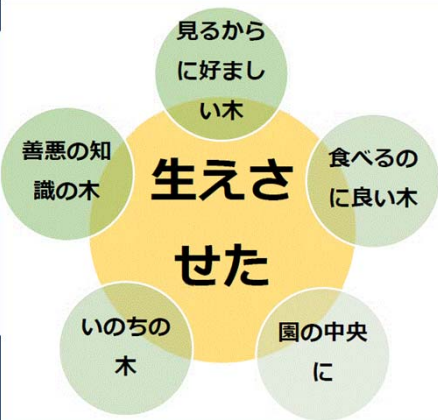
### (3) 「園の中央にある木」 (「ベトーフ ハガーデン」 בֵּתוֹף הַגַּרְדֵּן)

「園の中央に」と訳されたことばは「園のど真ん中に」という意味で「ベトーフ」(בֵּתוֹף)といいます。「中、間、真ん中」を意味する「ターヴェフ」(תָּוֶף)の連語形「トーフ」(תוֹף)に前置詞の「ベ」(בְּ)が付いた形です。すでに創世記1章6節に登場した語彙ですが、とても重要な語彙として取り上げます。それは単なる位置的なことではなく、最も中心的な事柄としてという意味も含まれています。

ユダヤ教のシナゴグでは、律法(トーラー)の朗読台は会堂中央位置にその座を占めています。それは、トーラーの教えこそ最も重要なもので、すべての出席者から等しい距離にあることを示すためだと言われています。

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

(創世記2:9)



## (4) 「いのちの木」 「エーツ ハハツイーム」 (עֵץ הַחַיִּים)

● 「いのちの木」という語彙は、聖書に11回—創世記(3回)と箴言(4回)とヨハネの黙示録(4回)—しか記されていません。ここでは黙示録に記されている「いのちの木」を見てみます。

### ① 【新改訳2017】ヨハネの黙示録 2章7節

耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。』

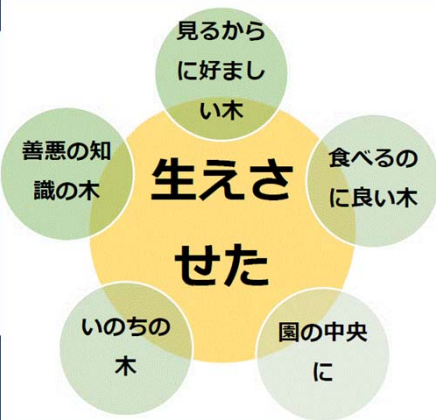
### ② 【新改訳2017】ヨハネの黙示録 22章2節

都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

(創世記2:9)





## (4) 「いのちの木」 「エーツ ハハツイーム」 (עֵץ הַחַיִּים)

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。  
(創世記2:9)

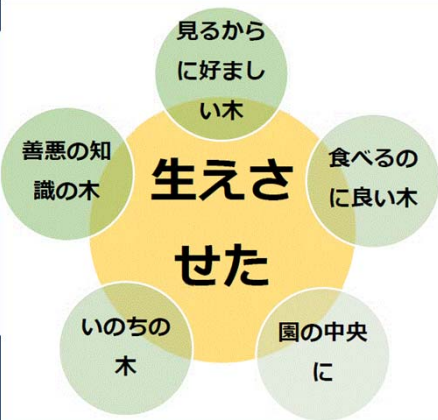
### ③ 【新改訳2017】ヨハネの黙示録 22章14節

自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の实を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。

### ④ 【新改訳2017】ヨハネの黙示録 22章19節

また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。

● 「いのちの木」とは、メシア・イエシュアが語る「神のことば」を意味しています。最初の人アダムはこの「いのちの木」を食べてはいませんでした。



## (5) 「善悪の知識の木」 「エーツ ハッダアト トーヴ ヴァーラー」 (עץ הדעת טוב ורע)

- 「善悪の知識の木」については、2章16節で詳しく扱います。9節においては、神である主が人の食べるのにふさわしい「木」、すなわち「神のことば」として、それをエデンの園の地に生えさせたという事実です。この事実を確認しておくことが、2章を理解する上で実に重要なことなのです。

神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。  
(創世記2:9)